

# 『御文』の「アヒタ」(間)について

石川洋子

はじめに

蓮如上人著『御文』には、「アヒタ」(間)という言葉が頻繁に出てくる。現代語と同じ意味で「ゝの間」と言う場合もあれば、現代語と意味用法の違う、いわゆる「中世語」とされる「ゝので」という意味の場合もある。こういった現代語と中世語の両方の意味用法を持つ「アヒタ」(間)ということばが多用されていることが、『御文』が分かりにくいとされる要因の一つであるとの予見のもと、この論文では、『御文』に使用された「アヒタ」(間)について考察するものである。

『御文』に使用されている「アヒタ」(間)について考察するに当たり、まず、蓮如上人により平易なことばで書かれたと言われる『御文』であるが、なぜ我々現代人に分かりにくいと言われるのか、その原因を探る。次に、こ

とばの面から、中世語とされるに至った「あいだ（間）」の語誌について考察する。最後に『御文』に使用されている全用例の「アヒタ」について調査検討し、『御文』に使用された「アヒタ」（間）の意味用法を明らかにする。

## 一、『御文』の「とば」

『御文』は、真宗門徒によって、『正信偈』、『三帖和讃』と共に朝夕もっとも親しまれている聖教である。しかし、それにも関わらず、『御文』の文章の意味に、分からないところが多々あると、多くの研究者（宗教・歴史・国語・国文学関係）により指摘されている。そこで、それらの指摘を次にまとめてみる。

『蓮如上人に学ぶ——御文をとおして——』の「はじめに」に、次のようにある。

『御文』は、私も宗門人にとって血肉となっている御聖教であるといっても過言ではありません。しかし一方では、蓮如上人のご苦勞による平易なことばへの表現が、当時との時代的な隔たりなどによって、正しく受け止められていない現状があることも否定できない事実かと思われまます。

また、出雲路修氏の講演録である「御文の表現」には、次のようにある。

我々が、蓮如の御文を読みますと、なにか変なわかりやすさと、変なわかりにくさがあるうと思うのです。

（九頁）

蓮如の使っていることは、現代語と割合に近いものがありますけれども、考えの基盤そのものに違いがある、

と。人間とはどういうものか、そういうことですらもう違いがありますから、よくよくしっかり読んでいかな  
いととんでもない読み違いをするであろうとそういうことを申しました。(十一頁)

さらに、藤原正己氏の「〈語る〉蓮如と〈語られた〉蓮如——戦国期真宗信仰のコスモロジー」<sup>注3</sup>の中に、次の  
ようにある。

中世社会に広く流布していた、いわゆる〈語り物〉と呼ばれる物語、説話集、寺社縁起、軍記ものなどの作品  
は、音声言語の文化に大きく依存した言葉である。それらは〈語る／聞く〉という場を媒介として、仏神と人々  
が、死者と生者が、地獄・極楽と現実世界が交感する場を容易に実現してくれる。このような訓練を日常的に  
積み重ねていた中世社会の人々が、蓮如や彼の教説の語り手を、仏・菩薩の化身と感覚したり、「御文」自体  
に往生の奇跡を起こす力があるとみなすことは、まったく当然のことであった。それは、決して音声言語圏の  
人々が無知であったことを意味しない。われわれ社会、もしくは文字文化の世界とは異質な世界に彼らが住ん  
でいたというにすぎない。(二八四頁)

同様な指摘が、片岡了氏の「仮名法語史から見た『御文』」<sup>注4</sup>に、次のようにある。

一般の「門徒」が「御文」(ただし五帖目)を各自に「読む」ようになるのは、その坊間における刊行の状況  
などから考えて、おおよそ近世以後とみられるが、古くは道場主(坊主)が声に出して読むのを、門徒が「聴  
聞」したと推察せられる。(二六八頁)

以上から、なぜ『御文』が現代人に分かりにくいのかという原因は大きく次の三点にまとめられる。まず、現代

と中世という時代の隔たりから来る言葉の相違である。二点目は、『御文』は中世の大部分の人々にとって、目で「読む」ものではなくて、耳で「聴く」ものであった。すなわち、「聴聞」という読み方の相違である。我々現代人は、門徒であれ、研究者であれ、『御文』の文章を各自が目で読むことを必然とされるのとは大きな違いである。三点目は、中世の人々にとって、「極楽往生」が切実な問題であった。このことは、つまり、我々現代人との生き方・考え方、価値観の相違である。

本稿は、以下、『御文』を、右の一点目に挙げた言葉の面から考察するものであるが、それに関して、片岡氏の前述の論文における有益な指摘を次に挙げる。

「御文」には、ときに文意のつづきにくいと思われるところがある。それは大部分その文構造の問題であると考えられるが、それについてはかつてふれたことがあるので、ここでは国語史的な観点から検討してみることにする。(一六九頁)

とあり、この文章に続けて『御文』に使用されている「しかれば」「されば」の例を挙げ、それらについて、次のような説明がある。

右の文中に「しかれば」「されば」という接続詞が使われている。この語は両者とも本来、いわゆる「順態接続」のはたらきをする語である。その語の前にある句や文と、その語の後に来る句や文とを、原因と結果、理由と帰結などの関係で接続する。現代語の「だから、ゆえに」などに相当する。ところが、いま右の文にあってはめると、文意が通じない。(一七〇頁)

そして、文意が通じないのは、「この語の意味用法が変化した結果である。」(一七〇頁)とある。この接続詞「しかれば」「されば」と同様に、意味用法が変化したことばの一つに「あいだ(間)」があるのである。

## 二、「あいだ」(間)の語誌

そこで、ここでは、「あいだ」(間)の語誌について、辞書の上から考察する。

まず、一般的な国語辞典である『現代国語例解辞典』(小学館<sup>社</sup>)で、「あいだ(間)」の意味・用法を見てみると、次の①から⑤の五種の意味がある。例文とともに示すと、次の通りである。

- ① 空間的に、二つの物に挟まれた部分。あいま。あわい。また、特に限られた空間の隔たり。距離。「東京と大阪との間」「五キロの間」
- ② 時間的に、限られた範囲。また、時間の連続の切れた部分。「学生生活の間に得たもの」「しばらく間を置いてから考えよう」「この間は失礼しました」
- ③ 人と人との関係。事物相互の関係。仲。「二人の間を裂く」「両国の間が不穏になる」
- ④ ある限られた集合や範囲を表わす。…のうち。…の中で。「若者の間で流行する」「我々の間では有名な話」
- ⑤ (接続助詞のように用いて)候文などで、原因、理由などを示す。…によって。…が故に。…なので。「欠席<sup>つかまつ</sup>候間お届けに及び候」「然<sup>しか</sup>る間」

『御文』の「アヒタ」(間)について

右の⑤の解説が、いわゆる「中世語」の意味・用法といわれるものである。⑤の意味・用法は、その用例を見ても分かるように、現代語では、おそらく、一般的には使用されなくなったものであろう。

では、そんな「あひだ(間)」にはどのような語誌があるだろうか。先ず、『岩波 古語辞典』の「あひだ」の項目には、次のようにある。

空間について、二つのものが近接して存在する場合、それにはさまれた中間の、物の欠けて脱(ぬ)けているところをいうのが原義。例えば緒に通した玉と玉との中間の玉のない部分。時間に転じては、鳴く鳥の声、波・雨の音などの中断する時。人間生活では休日、恋人と会えずにいる時など。ついで、ある限られた接統的な時間・期間をいい、ホド(程)に接近した。平安時代、この意味では多く漢文訓読体に使われた。院政期頃から、間柄の意味から関係をいうに至り、理由を示す接統助詞のような用法を展開した。

右に「接統助詞のような用法」とあるが、その用法が生じた時代、及び作品については、『古語大辞典』(小学館)の「あひだ(間)」の項目の「語誌」(竹岡正夫)に、次のようにある。

接統助詞の用法は、御堂関白記や台記など平安時代の記録文からみえ、その後、今昔物語集、平家物語のような和漢混淆文にも用いられるようになり、候文体の確立と相まって、候文の代表的語法となる。ただし、中世の擬古的和文にはほとんど用いられていない。

次に、『時代別国語辞典 室町時代編』の「あひだ(間)」の項目を見ると、その品詞は、「接統助詞的用法」の「的」が抜けて、接統助詞とある。その「名詞」と「接統助詞」の解説部分と、【参考】の三カ所を、次に

示す。

□ 多くは形式名詞として、その意味を限定する連体修飾語を伴うのが普通である。事態が存在し関係するの  
が一定の時間・空間、また、事物などの範囲内であることを示す。

□ 順接の接続助詞として用いられ、原因・理由などを表わす。

【参考】「間」が□の意から転じて□の接続助詞のような用法を派生したのは室町時代以前に遡るが、室町  
時代においても、日葡辞書に解くように、普通は候文、その他変体漢文の系統をひく文体に多く見られ、話  
し言葉でも、やや改まった言い方の場合に用いられた。

右に、「日葡辞書に解くように」とあるので、参考までに『邦訳 日葡辞書』<sup>注9</sup>の「Aida」の項目を挙げると、次  
のようにある。

Aida. アイダ (間) Ma に同じ。時間的な間隔、すなわち、期間、…する間、などの意。(例文省略)

また、空間的な間隔、すなわち、距離。(例文省略)

また、…の間で、あるいは、…の中で。(例文省略)

また、文書においては、…したので、の意。例、Mari sōro aida. Imōxi geru aida. (参り候間、または、申  
しける間) 私が行ったので、または、私が言ったので。

右では「候文」について触れていないので、さらに、『国語学大辞典』<sup>注10</sup>の「候文」の項目を見ると、次のように  
ある。

文語文のうち、おもに書簡に用いられる一種の文体。書簡文体とも。文章の中に「候」という語が「あり」の代わりに、また、補助動詞として、用いられるのが特徴である。

片岡了氏の『御文』論——異端との闘い<sup>註</sup>によると、『御文』は、「一通一通が書簡形式をとった一篇の『かな法語』である」とある。ここにおいて、『御文』が「アヒタ」を多用する理由があるのである。

### 三、『実如判 五帖御文』の「アヒタ」(問)について

ここでは『御文』に現われる「アヒタ」(問)の全用例について調査検討する。その際、『御文』の本文は、本證寺蔵『実如判 五帖御文』(『実如判 五帖御文の研究 影印篇<sup>註12</sup>所収)を使用する。また、以下、これを「本證寺本」と呼ぶ。

「本證寺本」のなかの「アヒタ」の用例を調査すると、全部で六十三例ある。その内訳は次に示す通りである。

一帖目(第一通〜第十五通)	……………十三例
二帖目(第一通〜第十五通)	……………七例
三帖目(第一通〜第五通)	……………十三例
四帖目(第一通〜第十五通)	……………二十七例
五帖目(第一通〜第十五通)	……………三例



右の六十三例の「アヒタ（間）」の用例を分類すると、名詞として使用されている用例は二十九例であり、接続助詞として使用されている用例は三十四例である。以下、名詞の用法をAとし、接続助詞の用法をBとして考察する。

### A、名詞の用法

名詞の用法の二十九例の中から、参考として、三例を挙げると、次の通りである。但し、本證寺本を引用する際、漢字に示されている傍訓は省略する。

a、マツ人間ハ タタユメマホロシノ アヒタノ コトナリ

（二帖目・第十通、六三頁・三行目、傍線・石川、以下同様）

b、愚老コノ四五ヶ年ノアヒタハナニトナク 北陸ノ山海ノ カタホトリニ居住ストイヘトモ

（三帖目・第十一通、二八五頁・五行目）

c、五劫カ アヒタ 思惟シ 永劫カ アヒタ 修行シテ  
（五帖目・第二十通、四八三頁五・六行目）

二十九例の名詞の用法の「アヒタ」の上接語をまとめると、右の用例aとbのように、「ノ アヒタ」と、助詞「の」が上接する場合と、用例cのように、「カ アヒタ」と、助詞「が」が上接する場合とがある。その用例数は、次の通りである。

「ノ アヒタ」……二十三例

「カ アヒタ」……六例

では、それぞれの助詞の上接語を具体的に示すと、次の通りである。その際、『御文』の帖数と何通目かを括弧内に示す。

○ 助詞「の」の上接語

「コノアヒタ」(一帖目・第一通)

「三ヶ国ノアヒタ」(一帖目・第五通)

「ユメマホロシノアヒタ」(一帖目・第十通、第十一通)

「坊主卜門徒ノアヒタ」(一帖目・第十一通)

「報恩講ノアヒタ」(二帖目・第一通)

「四ヶ年ノアヒタ」(二帖目・第三通)

「三四年ノアヒタ」(二帖目・第五通)

「五十年百年ノアヒタ」(二帖目・第七通)

「一期ノアヒタ」(二帖目・第十通、三帖目・第三通、四帖目・第四通、五帖目・第十五通)

「京田舎ノアヒタ」(三帖目・第五通)

「当国他国のアヒタ」(三帖目・第八通)

「四五ヶ年ノアヒタ」(三帖目・第十一通)

「コノコロノアヒタ」(三帖目・第十二通)

「七昼夜ノアヒタ」(四帖目・第六通)

「一七ヶ日ノアヒタ」(四帖目・第六通)

「両三年ノアヒタ」(四帖目・第六通)

「七八ヶ年ノアヒタ」(四帖目・第八通)

「一定ノアヒタ」(四帖目・第十三通)

「当流法義ニモ アヒカナフ歟ノアヒタ」(四帖目・第十五通)

○ 助詞「が」の上接語

「五劫カアヒタ」(三帖目・第一通、第二通、五帖目・第二十通)

「永劫カアヒタ」(三帖目・第一通、第二通、五帖目・第二十通)

以上から、名詞の用法の「アヒタ」の上接語は、「の」と「が」の二種の格助詞であり、また、「が」が使用される上接語は慣用句的に使用される「五劫・永劫」に限定されていることがわかる。因に現代語では、「の」だけが「あいだ」の上接語である。意味は両者とも、現代語の名詞の用法と同じである。

## B、接続助詞の用法

接続詞の用法の三十四例の中から、参考として、三例を挙げると、次の通りである。

d、コレモ シカル ヘクモ ナキヨシ 人ノ マウサレ候 アヒタ オナシク コレモ不審千万ニ候

(一帖目・第一通、六頁・一行目)

e、吉崎トイフコノ在所スケレテ オモシロキ アヒタ

(二帖目・第八通、四十八頁・一行目)

f、愚老カ 年齢ステニ七句ニ アマリテ 来年ノ報恩講ヲモ 期シカタキ 身ナル アヒタ 各々ニ 真実

ニ 決定信ヲ エシメン人アラハ

(四帖目・第八通、三八一頁・五行目)

三十四例の接続助詞の用法の「アヒタ」の上接語は、右の用例 d「候」、e「オモシロキ」、f「ナル」と同様、すべて活用語の連体形であり、「アヒタ」は順接の接続助詞の働きをする。また、その意味は、原因・理由を示す。その活用語をまとめて、品詞別の終止形で示すと、次の通りである。

動 詞：「候ふ」、「思ふ」、「然り」、「有り」、「思ひ出る」、「爲」

形容詞：「難し」、「無し」、「面白し」

助動詞：「ず」、「る」、「しむ」、「べし」、「なり」(断定)、「たり」(断定)、

右の活用語を用例の多い順にまとめると、次の通りである。

「シカルアヒタ」……………八例（一帖目・第八通、四帖目・第一通、第三通、第五通、第六通、第七通、第八通・二ヶ所）

「候アヒタ」……………三例（一帖目・第一通・三カ所）

「ナキアヒタ」……………三例（四帖目・第七通、第八通・二カ所）

「シサルアヒタ」……………三例（一帖目・第十二通、三帖目・第十通、四帖目・第十三通）

「シムルアヒタ」……………三例（四帖目・第一通、第四通、第八通）

「シナルアヒタ」……………三例（一帖目・第八通、四帖目・第八通・二カ所）

「オモフアヒタ」……………二例（一帖目・第一通、三帖目・第十通）

「シタルアヒタ」……………二例（三帖目・第十通、四帖目・第一通）

「ヨモシロキアヒタ」……………一例（一帖目・第八通）

「アルアヒタ」……………一例（二帖目・第三通）

「シヘキアヒタ」……………一例（二帖目・第三通）

「カタキアヒタ」……………一例（三帖目・第四通）

「思出之問」オモヒイッアルアヒタ……………一例（四帖目・第二通）

「スルアヒタ」……………一例（四帖目・第八通）

「シル アヒタ」……………一例（四帖目・第十三通）

以上から、「アヒタ」の上接語は、活用語の連体形であり、「アヒタ」は順接の接続助詞である。また、その意味は、原因・理由を示す。ただし、「シカルアヒタ」については、後述する。

以上、『御文』の「アヒタ」（間）の全六十三例のA、名詞の用法 B、接続助詞の用法についてまとめたが、ここにおいて検討を要する問題が二点ある。それをC、その他として次に考察する。

### C、その他

第一点は、A、名詞の用例における「一定ノ アヒタ」の本文に異同があるための検討であり、第二点は、B、接続助詞の用例における「シカルアヒタ」についての検討である。

まず、第一点であるが、その「一定ノ アヒタ」を含む一文を、次に示す。

サリナカラ 予カ 安心ノ一途一念発起平生業成ノ 宗旨ニヲイテハ イマ一定ノアヒタ佛恩報盡ノ 称名ハ  
 行往坐臥ニワスレサルコト 間断ナシ (四帖目・第十三通、三九八頁・一行目、波線・石川)

この本文の異同は、出雲路修校注『御ふみ』<sup>注</sup>に、次のように指摘されている。

「いま」は、『遺文』145（底本は、『堺真宗寺本』）に「令一定間」(一定セシムル間)とある「令」を、「今」とあやまったものか。

本文の異同に関しては、本稿の論者・石川にはどちらの本文が正しいのか分からないところであるが、「アヒタ」

の意味用法から見ると、ここは接続助詞の用法の「アヒタ」となるべきところではないかと思われる。つまり、この本文が「イマ一定ノアヒタ」とあり、これを名詞として、「今、確かなことの中で」と曖昧な解釈をするよりも、この本文が「一定セシムル間」とあり、これを接続助詞として、「確かなこととさせているので」と理由を示して解釈した方が、この一文の解釈として適当なのではないかということである。

因に、『御文』の中には、「一定」の用例はこの用例も含めて五例ある。すべて、名詞であり、意味は「確かなこと」である。参考までに、右以外の「一定」の用例を次に示す。

「コノタヒノ往生ハ一定ナリ」（一帖目・第五通、三三頁・六行目）

「今度ノ往生ハ一定ナリ」（一帖目・第十通、五九頁・三行目）

「今度ノ極楽ヲ一定シテ」（四帖目・第十三通、四〇〇頁・五行目）

「カナラス往生ノ本懐ヲトクヘキ条一定トオモヒハンヘリ」（四帖目・第十五通、四一〇頁・四行目）

次に、第二点であるが、「シカルアヒタ」は、前述においては、ラ行変格活用動詞「然り」の連体形「然る」に接続助詞「アヒタ」（間）が付いたものとして扱ったが、実は、「シカルアヒタ」は一語の接続詞として扱うべきものではないかと考えている。なぜならば、八例すべての「シカルアヒタ」の前の語は、すべて終止形であり、そこで文が終止していて、「シカルアヒタ」は文頭に来ることばであるからである。

また、峰岸明氏の「今昔物語に於ける変体漢文の影響について——『間』の用法をめぐって——」<sup>注14</sup>に、次のようにある。

「あひだ」は、位相的には男性語であり、形式体言的用法の「間」や接続詞「然間」・「而間」は、文体的には変体漢文本来の用法であると認定できるのである。

「シカルアヒタ」は、変体漢文における接続詞「然間」・「而間」から連なって来たことばであり、蓮如上人の頃には、すでに、接続詞として使用されていたと推察される。

「シカルアヒタ」の意味は、前述の『古語大辞典』（小学館）によると、名詞として次のようにある。

- ① そうしているうちに。
- ② それゆえ。したがって。だから。

同様の意味であるが、『広辞苑』第四版注15によると、接続詞として次のようにある。

- ① そうしている間に。さるほどに。
- ② そんなわけで。それゆえ。

したがって、接続助詞「アヒタ」の原因・理由を表わす「ゆえ、から、ので」という意味だけでは、「シカルアヒタ」が①の意味の場合、文意が通じない用例が出て来るのである。

『現代の聖典 蓮如 五帖御文』注16による「シカルアヒタ」全八例の「現代語訳」の部分を見ると、次の通りである。括弧内は現代語訳のある頁・行を示す。

- a、一帖目・第八通は「それゆえ」（三三頁一七行）、
- b、四帖目・第一通は「そこで」（一八六頁一〇行）、



- c、四帖目・第三通は「そのようなわけで」（一九四頁一九行）、
  - d、四帖目・第五通は「ところが」（二〇五頁九行）、
  - e、四帖目・第六通は現代語訳、無し。（二〇九頁）、
  - f、四帖目・第七通は「そこで」（二一四頁三行）、
  - g、四帖目・第八通は「ところで」（二三三頁一四行）、
  - h、四帖目・第八通は「いつのまにか」（二二四頁二行）、
- 右の「シカルアヒタ」の現代語訳で、疑問に思うところを次に指摘しておく。

dは、「ところが」と逆接の意味で訳されているが、順接の接続詞「シカルアヒタ」を逆接に訳してよいのだろうか。

eは、現代語訳がなされていないが、「それゆえ」という解釈を入れるべきではないのか。

gは、「ところで」と話題転換の意味で訳されているが、ここは「したがって」とあるべきではないだろうか。

hは、「いつのまにか」という意識がなされていて、一見名訳に見えるが、「シカルアヒタ」の意味は「そうしているうちに」であり、「そうしているうちに、いつのまにか」というふうには、話題は展開していくところであり、それを意識した上での解釈であろうか。

## 終わりに

以上、『御文』の「アヒタ」(間)について考察した。その結果、次のことが言える。

「アヒタ」は、『御文』に全部で六十三例使用されている。その意味・用法は、名詞と接続助詞の二種類ある。その全六十三例の内訳は、名詞は二十九例であり、接続助詞は三十四例である。

さらに接続助詞三十四例の中、「シカルアヒタ」は八例ある。この語はもともとラ行変格活用動詞「然り」の連体形「然る」に接続助詞「あいだ」が付いたものであるが、『御文』では、「シカルアヒタ」は一つの品詞、つまり順接の接続詞として使用されている。接続詞であることを意識しないで現代語訳をすると、文意が明確でなくなる場合がある。

最後に、「アヒタ」の名詞の意味・用法は現代語においても卑近に使用されているが、「候文」の代表的語法である接続助詞の意味・用法は現代では一般に使用されなくなっている。接続詞「シカルアヒタ」も現代では使用されない。この「アヒタ」という言葉だけの結果からだけでは分からないが、『御文』が我々現代人に「変なわかりやすさと、変なわかりにくさ」があるというのには、現代語と中世語の意味・用法を併せ持つ言葉が『御文』には多用されていることに、一つの原因があるのではないかと思われる。

『御文』を正確に読むためには、これからは、言葉の面では、中世における接続関係の語の働きを一つ一つ明ら

かにしていくことが必要であると考える。

〔注〕

- 1 『中央同朋会議・報告Ⅲ』所収、真宗大谷宗務所 企画室 平成三年三月
- 2 『同朋学園 仏教文化研究所所報』第八号 一九九二（平成四）年三月
- 3 『講座 蓮如 第一巻』所収、浄土真宗教学研究所、本願寺資料研究所編 一九九六（平成八）年十二月 平凡社
- 4 『講座 蓮如 第二巻』所収、浄土真宗教学研究所、本願寺資料研究所編 一九九七（平成九）年三月 平凡社
- 5 林巨樹監修『現代国語例解辞典』一九八五（昭和六十）年十二月 小学館
- 6 大野晋、佐竹昭広、前田金五郎編『岩波 古語辞典』一九七四（昭和四九）年十二月 岩波書店
- 7 中田祝夫、和田利政、北原保雄編『古語大辞典』一九八三（昭和五八）年十二月 小学館
- 8 室町時代語辞典編修委員会編『時代別国語辞典 室町時代編一』一九八五（昭和六〇）年三月 三省堂
- 9 土井忠夫、森田武、長南実編訳『邦訳 日葡辞典』一九八〇（昭和五五）年五月 岩波書店
- 10 国語学会編『国語学大辞典』一九八〇（昭和五五）年九月 東京堂
- 11 『国文学 解釈と教材の研究』第四一卷八号 一九九六（平成八）年七月号 学燈社 一二三頁上段。
- 12 『実如判 五帖御文の研究 影印篇』（『同朋大学仏教文化研究所 研究叢書Ⅱ』所収）一九九九（平成十）年三月 法蔵館
- 13 蓮如、出雲路修校注『御ふみ』（東洋文庫345）一九七八（昭和五三）年十二月 平凡社 三二〇頁。
- 14 『国語学 三六輯』一九五九（昭和三四）年三月 六二頁下段。
- 15 新村出編『広辞苑』第四版 CD-ROM（カラー版）一九九五（平成七）年 岩波書店
- 16 細川行信、村上宗博、足立幸子『現代の聖典 蓮如 五帖御文』一九九八（平成十）年三月 法蔵館

『御文』の「アヒタ」(間)について